

Roy & Pearl

— 円盤と宇宙哲学の研究誌 —

日本GAPニューズレター

1964

7月 - 8月

Japanese GAP Newsletter
July - Aug.

Editor
H. Kubota

日本GAPニューズレター

— 1964 —
7月・8月号目次

— 通巻第23号 —

生命の科学 2	G・アダムスキー	1
推せん図書		14
最近の情報	G・アダムスキー	14
質疑応答	C・A・ハニー	21
ニューズダイジェスト		23
テレビジョン講座 5	C・A・ハニー	25
編集後記		33

Science of Life by G.A. (Lesson 3 & 4)

— 1 —

生命の科学	
2	
G・アダムスキ	

第三課 宇宙の法則の応用

第二課では、「神の意志」という言葉を用い、神は人間の体験の責任者ではないと説明しました。このことをはっきりさせるために、例として電気を引用しましょう。

電気を作る発電所の従業員は電気を送り出し、一般人はそれを利用するための福祉のために利用します。従業員は電気の性質やその扱い方を知っていますし、一般人もその利用法を習います。教えられたとおりに用いるならば多くの点でその恩恵に浴することもできますし、その法則に従うならばそれでもって実験を行なうこともできます。

たとえば電気のソケットは電球をさし込むために作られているのであって、電流がそこへ流れているときに指を突っ込むために作られているわけではありません。それはあたりまえのこととしても濡れ手でそれをつかめば感電することがあります。しかし、た

とえ電気の法則の誤用によってケガをしたり不愉快な体験を持つたとしても、本人は電力を喜んで供給している発電所の従業員を非難することはできません。法則にたいする無知かまたは自分の無茶な行為のために自分だけを非難すべきです。

宇宙の創造者は人間に生命力と意識という径路を通じて英知を与えています。そして個人のエゴ（自我）の心は法則（創造者の法則）に従ってこれらを（生命力と英知を）良い方向に応用できますし、または法則を犯して悪い結果を得ることもできますが、これは電気の場合と同様です。万人はこのための自由意志を与えられているのです。

ここで別な好例としてテレビの受像器をとりあげることにしてしましよう。受像器自体の内部には電気も英知もありませんが、人間の脳または心に相当する各種部品があって、それは電気が供給されるまでは働くことができません。電気が流れ込んでくると知的な表現が始まります。つまり、メッセージを運ぶ電波によって知性が受像器の中に吸い込まれるといえるでしょう。そうすると知的な表現が起こり、メッセージが入って来るのみならず、スクリーン上に個人が生ける映像として示されます。私の知るところで、米国には八十種類のチャンネル（周波数帯）があって、それによって番組が放送されています。各チャンネルは他のチャンネルすべてと分離していますが、なかには周波数が類似しているために他のチャンネルを妨害するものもあります。そこで各チャンネルをはっきり分離させるためにはきわめて優秀な受像器を必要とするわけです。あらゆるチャンネルは同一の電力と同一の法則を応用しますが、なかには数チャンネルしか入らない受像器もあります。しかしあら

ゆる受信器は電力と電波の力をかりなければなりません。また番組を續けて映し出すためには電波を吸い込んだり吐き出したたりしなければなりません。

人間もこれと同様です。人間には、いわばあらゆる表現能力が内蔵され潜在しているからです。そして人間は生命の呼吸を行なつて、それを吸い込んだり吐き出したたりする必要があります。もしその呼吸をやめるならば、何の動きもない静止した道具となります。しかも吸い込むだけで吐き出すことをしなければ生命の連続状態は停止するでしょう。人体を活動させるためには絶えずこの『生命の呼吸』が人体を流れねばなりません。これはテレビ受像器を生かす電波に比較できません。注意しなければならぬのは、生命も電波もいたる所に存在してそこに障壁はないけれども、表現するためには道具を必要とするということです。

人間の心はテレビの検波管にたとえてよいでしょう。これは電気が供給されない限り機能を發揮できません。意識はこの電気と知性のようなもので、生命の呼吸という方法によって心を刺激します。われわれが空気と呼んでいるこの息なくしては何物も生きることができません。一粒の砂でさえも生きることができないでしょう。万物がその息に頼っているからです。その息が各種の形態を通じて現われるとき、それは完全なメロディを生み出し、充分に生命を表現します。

われわれが自然の中の調和した融合を觀察するとき、全く等しい二人の人間を見ることはありません。この理由は、人間は自由意志を持っていて創造者の法則の応用法を知らねばならないからです。人間が完全な表現の道具となれば、自由意志をもってその

法則の正しい、または誤った応用法を知るでしょう。そしてこれが人間の存在の目的です。前課で説明しましたように、人間は感覺器官のすべてを等位に統合しながら自己のエゴのセンスマインドを訓練しなければなりません。これは、もし調和あるメロディを表現しようということになれば音楽家がヴァイオリンの各糸を調律するのに似ています。

心の意志のかわりに意識の意志である『神の意志』の指導としてやって来る印象類を応用する方法をエゴは知らねばなりません。調和ある生活を楽しもうとすれば、心の意志は意識の意志に従う必要があります。そうすれば、『神の意志』が行なわれるのです。心の意志と意識の意志のあいだの相違は、意識の(神の)意志は自らを押しつけはしないという点です。意識の意志の表現は親切で豊かで美しいのですが、エゴの意志は攻勢的で威張つていて自己中心的です。意識の意志は恐怖を知りませんが、エゴの意志は生活すべてを通じて恐怖し、多くの過失をおかします。

自然界の万物は、『宇宙の法則』の意志によって働いています。人間だけは別です。平たくいえば、自然は自身をその法則すなわち創造者の意志に貸しているのです。人体も自然の万物と同様に同じ法則のもとに働いているのですが、人間の自由意志はそれに反して働いています。

神の意志は常に完全な調和をもって表現し、いかなる現象にもゆがみをひき起こしません。だからこの意志のもとにある人体はかくも見事に表現されているのです。しかるに人体は自由意志またはエゴの意志によって、いかなる他の個体よりも濫用されています。たとえば人が食事するとき、人間の心またはその意志は肉

体中で食物に何が起ころうとしているかを知りません。もしエゴが楽しい調和ある状態にあるならば食物は肉体にとって有益になります。一方、もしエゴが動揺し、混乱し、緊張し、法則すなわち意識と不調和するならば、必ず不消化と便秘が起ります。神の意志はしかるに人間のゆがめられた意志に自らを貸しません。そこで人間は苦痛によってそのゆがみにたいする代価を支払います。これは或る種の人々が学びとるための唯一の方法です。

しかしさいわいにも、肉体中で或る調和の法則が働いています。これは心とは別な存在です。さもなければ肉体は多年生き続けることはできないでしょう。

以上でもって人体内には知性の二つの面があることがわかります。一つは肉体の機能を指示する宇宙的なもの、他の一つは肉体内に苦痛を起す心の対抗です。或る牧師はこのことを次のように巧みに表現しています。「人間は反神的になってしまった」これは真実です。なぜなら人々にはもはや創造者の指導を求めようとはせず、生命の贈与者をなくてはならぬものと思っていないからです。その結果人間は恐怖という主人のもとで極端に自由意志を行使しています。そこでどん欲が横行しているわけですが、これは今後も続くならばこの文明を必ず破壊するガンのようなものです。こうした状態は自由意志の結果であって、その場合一個人の意志は他人を信用しなくなります。しかし、人間の意志が創造者すなわち意識の意志を信用しないとき、どうすれば信用することが可能になるでしょうか。

われわれはその結果を見ることができません。なぜなら世界中が恐怖という雲の下で—すなわち互いに敵対しながら—生きています。

からです。そしてだれも他人を信用しようとはしません。あなたはここでどうかもしれません。「それは迷惑な話だ」と。だがそれは増上慢におちいったエゴすなわち人間の心の産物です。なぜならエゴはもはや意識すなわち創造者によって指導されようとはしないからです。

私が意識という言葉をひんばんに用いてそれを強調している点をあなたは感ずるでしょう。そして「なぜか?」と思うかもしれせん。そこで理由を述べますと、意識は長いあいだ無視されてきたのには増長してきたからです。イエスは「あなたがたは生ける神の宮だ」といったではありませんか。それはこんなふうにもいえるでしょう。「あなたが生ける意識の具体化したものであることを知らないのか」

「生命の呼吸」はその証拠であって、それは生きとし生けるものにタダで与えられています。最初はただのチリの(物質の)人体が、創造者から与えられた、鼻孔へ吹き込まれた、生命の息によって生ける人体となり、生ける魂となり、意識ある実体となったのです。新しく生まれた子供は仰向けにばかりと置かれ、最初の呼吸をするように仕向けられます。そうしないと生きものにならないでしょう。ここで注意して下さい。心は部分的にのみ働いているにもかかわらず、赤ん坊は意識的に生きています。

幼児は恐怖に直面するまではそれを知りません。恐怖が心と共に働き始めて傷ついても、恐怖という状態が起こってくるのです。このことは意識が恐怖を知らないことを示しています。なぜなら意識はあらゆる知識の所有者であるからです。心はその知識を持たないで恐怖の中に生きています。その結果生命とその永続性

に關してあらゆる種類の神秘を促進しています。

いまやこの講座は第三課に入っていますが、私はこれまで精神統一や冥想を行なうことを読者に要求しませんでした。どちらかといえば、こうした古代の方法は今日われわれが世の中で直面している不愉快な状態をもたらしています。

私があなたにおすすめるのは、あなたの真実の自我、あなたの内部に宿る永遠の神性すなわち創造者である部分に気づくようになりなさいということです。あなたの行なうすべての物事の指導者としての「意識」なるものをあなたの心に気づかせなさい。すると別な有名な教訓「自分自身を知れ。そうすれば万事が理解できるだろう」という言葉が具体化してくるでしょう。そのためには心が常に意識を信頼することを知る必要があります。

また私は読者に普通の生活をすこすことを禁じませんでした。(訳注) 特殊な行法や祈りなどの伴う異常な生活をすすめなかつたの意) あなたにすすめたいのは、心の知力による生活でなくて「意識的な生活をすこすこと」これに尽きます。そしてあらゆる物事を適度に行ない、それを応用しなさい。こんなふうにして他の惑星の友は知識において生長し、天国のような生活を送っているのです。

法則の両面を応用しなければ現象または良い結果は持てないということを記憶して下さい。その両面とは客観と主観、陰と陽、女性と男性です。この一面のみを応用して他方を除外しながら好結果を期待することはできません。一例として電気をあげましょう。電気は二つの面すなわち陰と陽から成る一つの力です。陰陽のいずれか一方のみでもって有効な力を得ることはできません。

しかし両者が組み合わされてバランスが保たれると、完全に現われます。

宇宙の法則もこれと同様です。陽性の独断的な考え方は好結果をもたらさないでむしろ多数の人を傷つけます。神の目的を二つに分割して良い結果を生み出すことは不可能です。たとえ人間は長い時代を通じて理解力が欠乏し、利己的な攻勢力で物事を行なう習慣が身につけてきたにせよ、およそ創造者の法則を無視してその一部を除外することはできません。しかるに人間は万物の存在する理由を知ることもなく創造者の創造物を非難しています。こうして人間は創造者そのものを無視し、創造者の英知の上位に自我の心を増長させているのです。

しかも人間は創造者のものであるわれわれの意識から自分を分離させることによって人間自身の誤った創造物に夢中になっています。そのため人間は知的な巨人とはなつたけれども意識的見解を持たぬ精神的低能となり果てています。

意識という海の中へあらゆる生きものを集めるかわりに、人間はそれを分割し引き離しています。だから人間は自分や全生物を貫いて現われている神の生命を見ることができないのですが、他の惑星の友は見る事ができるので、というわけは、進化した惑星人が、たとえ人間だろうが他の動物だろうが、とにかく一つの生物を見るときは、その外形だけを見ないで、それを支えている意識を見るからです。これは生きものを通じて現われている創造者を見ることなのであって、そのとき人間の心の意志でなく、あなたの(神の)「意志」が行なわれることになるわけです。彼ら惑星人の世界や、そこに住むすべての生命体は創造者の意識的な

現われであり、またそのように尊ばれているのです。

あなたにはいま理解できると思いますが、人間または人間の心は創造の過程にあるのであって、学習によって完全な現われ方の方向へ働きかけています。これについて時間は関係ありません。永遠の中には時間はないからです。そこで創造物の存在の理由を知ることができるよう、創造物のさまざまな面を研究することがわれわれの義務であるのです。ですから知識の欠乏のために過去にやってきたようにはもうこれ以上創造者を批判しないことにしようではありませんか。というのは、実は人間は創造者やその創造物のいかなる物をも批判したりすることはできないからです。人間が生命の目的を徹底的に研究するならば、理解が批判にとってかわります。そのとき最高の表現としての人間は創造者と一体になり、人間の英知は創造者の英知と調和するからです。

あなたは尋ねるかもしれませんが、行為または表現の結果として人間が分類している知性なるものを筆者はどのように分類しているのかと。われわれがこれと同じ分類法を用いるならば、人間は知能の海の中に生きているということを認めなければなりません。生きて表現している万物は知能の或る面を利用して、創造された目的を遂行しています。こうした低級な動物のすべては自然の指導のもとに自動的に働いています。創造者の直接の指導によってといったもよいでしょう。

私が「自然」と呼ぶとき、それは神の母性原理の典型として用いられます。自然は万物を生み出した母体であるからです。これは生命の女性面であり、一方「至上なる英知」は男性面です。そしてこの二つは多くの現象を生み出すために一体となって働いて

います。

われわれにわかるように、生命の九十パーセントは直接指導の法則によって支配されています。人間の部分を占める残りの十パーセントは自身の自由意志を用いることによってその法則から自分を切り離しています。

地球上の最初の人間が生活において自分を導く教師を持たなかったとしましょう。そこで彼は教師として自然を利用しなければなりません。つまりさまざまな種類の葉を持つ木々のあいだを流れる風の音を聴きながら、彼は各風がそれぞれ異なる音を立てることに気づきます。また鳥の声や小川のせせらぎ、その他の自然の物音を聴きながら彼は自らそうした音を作り出そうとします。そこで笛のような物を作り、後には他の楽器類を作ります。結局、人間は自分の創造者のようになりたいのであって、それでこそこれまで自然は人間の最高の教師であったのです。

今日でさえも人間は海底や大気圏外へと活動しますが、これは全く自然から学びたいからにほかなりません。

ところが、人間の学習の最も不幸な部分は、エゴが短気であり、エゴ自体を自己の教師すなわち創造者の上位に置こうとする態度にあります。人間のおかす最大の過失はこの点にあるのです。あなたの（神の）意志、のかわりに自分の意志を応用し、かくて物事を単純にしないで複雑にしているのです。人間は、自己の教師であり万物の生命でもある意識に従わないで、生徒であるべき筈の自分の心に従っています。人間にとって唯一の救いは自然の指導のもとへ帰ることにあります。人間はいかに多くを学び、いかに年令を重ねても絶対に自然から離れることはできないから

です。自己の知識を評価するものは自然であらねばなりません。

今日あらゆる探究の分野に学者がいますが、学者のすべては自然の要素と生命体の生産を探究することによって自己の知識を自然に頼る必要があります。また人間は生活それ自体を自然に頼らねばならないので、自分のエゴよりも自然を指導者にする必要があるのです。いいかえれば自分の心のかわりに意識を自己の指導者にするべきです。

体験からしてわれわれは自然が「至上なる英知」によって支配されていることを知っています。

そこで英知という言葉に返ることにしましょう。われわれはあらゆる状況からして人間が英知を現わしていると考えてよいでしょう。しかし人間が自己を表現するとき、われわれは自分の考え方の誤りに気づきます。(訳注。人間のなかにはまるで知能のないのがあるように見えることもあるの意)だが謙虚な上品な人を見ると、われわれにはその人の表現から本人が全く知的であるように見えます。そこで人間は表現または行為によって知能を分類しているわけです。

あらゆる自然物はさまざまの度合に英知を現わしています。なぜなら自己が創造された目的を表現しない砂一粒といえども存在しないからです。砂は人間よりも巧みにそれを表現しています。ほっそりとした若枝が最初は草の葉として、宇宙の力を応用し、自然界を指導する英知に従いながら堅い土地の中から出て来ます。しかし人間が堅い土地の中へそのまま入り込むことは困難です。人間は今日持っている知能のすべてをもってしても、リンゴその他の果実がどのようにしてただの花からそんなに成熟するかに

関する正確な解答を出すことはできません。

ルーザー・パーバンクは(訳注。一八四九—一九二六。米国の植物改良家。ジャガイモ、トマト、ブドウなどのほか多数の新種を作り出した)いみじくも次のようにいっています。「自然が私に植物改良の知識を与えてくれたのである」また彼は創造者と共に働き、創造物を通して創造者と直面したとも述べています。人間は真の教師すなわち万物の意識という指導者のもとへ帰るまでは、現在耐え忍んでいる骨折仕事や周囲の混乱などから解放されはしません。われわれはその指導者の現われの中に生きており、その一部であるのです。

右のことをわれわれにもたらすものは祈りや冥想などではありません。心の結果に頼らないで、原因を知る完全な意識の実体に生まれかわることによってもたらされるのです。いいかえればわれわれは学習の過程を逆転させる必要があります。心の一つのエゴとしての知能で気づくかわりに、心が意識に気づくようにならねばなりません。意識的な知覚力こそ心にとって知識の貯蔵庫の錠をはずすカギであるのです。それは創造者と創造物のあいだをつなぐ輪です。

ひとたび人間がこのことに気づいて日常それを応用するならば、人間はもはや物事を複雑にしなくなり、自ら創造者との一体性を感ずるでしょう。

金星人や他の惑星の住民はこのことを行なっていて、そのため自らを進化させています。彼らは自然と闘わないで、その法則を理解することによってそれと融合しているのです。この理由で彼らは自分たちの惑星をも含むあらゆる現象を神の創造として尊

ぶわけです。彼らは、創造者は自分よりも（創造者よりも）劣る物を創造することはできないという考えを生かしています。そして万物にたいしてもこの感じを持ちながら、いたる所に現われている神性を見るのです。

ルーザー・パーバンクがいったように彼ら惑星人は創造者に直面します。かくて彼らは互いに役立ち合っている万象の相互関係と目的とを学び、それによって創造者に役立つのです。

次の第四課ではこの相互関係を説明しましょう。混乱をなくそうとするのならばそれは理解するのに重要です。読者におすすめしたいのは、あらゆる行為または想念の背後に存在する真の自我であるところの「意識」についてあなたはますます意識的になりなさいということです。もっとやさしくいえば、あなたが行なったり見たりするすべての物事において、これまでエゴの心を与えてきた認識を意識に与えなさいということになります。あらゆる行為や言葉の背後にある不可視の英知に気づきなさい。そうすればついにそれが自動的に行なわれるようになります。

あなたがもっと広い生命界を楽しみ理解し始めれば、自分が進歩していることがわかります。そしてこれまでよりもっと早くアイデアや考えがわき起こってくるでしょう。「信じられない」という立場からすべてを疑わないで、あらゆる想念や行為を分析して、それらが前もって考えられた心の反応にすぎないか、それとも意識的な反応なのかを調べてみなさい。そしてその想念や行為が他との関係においてあなたの生活にふさわしいかどうかを調べてごらんください。

すぐれた性質の音楽に留意すると同様に、あなたの心をでき

るだけすぐれた性質の生命体に向けるようにしなさい。これを日常行なえば進歩しないわけにはゆかないのです。

第四課 万物の相互関係

先課では、混乱をなくすためにできるだけ簡潔に万物の相互関係を説明しようと述べました。そこで人間にたいして役立っている多くの領域について扱うことにしましょう。その領域のどれがなくても人間は生きることができないし、宇宙の形成は完成されないからです。

人間が自身自身に関連する生命界のあらゆる面を理解することは、英知の最高表現としての人間の義務です。

分析として先ずわれわれの理解力ではほとんど無価値なもののように思われる不可視なガス類から始めることにしましょう。このガス類のなかには密度と用途の異なるさまざまな種類があります。そしてこのガスから固型化した多くの個体が生じます。

このガス状の中に最高の活動が存在しています。そして各ガスは各種の状態を生じるために絶えず互いに化合したり分離したりします。或るガスは化合してからゆっくり活動を始め、それを続けて遂に一個体となります。その緩慢な段階の始めの部分では、われわれが化学成分として分類している液状となりますが、その段階においては一種の化学成分は他の成分と化合して元の状態とは異なる様相を呈してきます。

この混合の過程を通じて極端な熱と極端な冷気とその中間の数多くの変化が発生します。そして或る種のガスと液体の化合は、

おだやかなまたは激しい燃焼を起こします。しかしこの活動からガスといくぶんかの物質とから成る液体の凝固が起こります。だがまだきわめて希薄であるために顕微鏡その他の装置を用いてそれを検出することはできません。しかしそれらは存在するのであって、この惑星上に存在する物を生み出すために、存在しなければならぬのです。

そこでわれわれは当然あらゆる惑星と物質はほとんど同じ物でできていると考えます。ただ違うのはそれらの大きさ、密度などです。

この点においてわれわれは元へ返って分析し、自己再生に必要な成分のすべてを具体化するところの一形態を作り出すために、何のために右のような段階があるのかを考えてみましょう。

この太陽系の一惑星は例としてよい場所になります。それは多くの個体を次々に生み出している無数の惑星を代表しているからです。

さて液体を形成するためにガスがやったように、液体の活動がゆっくりと行なわれて凝固し始めるときに物体が創造される段階を心に思い浮かべてみましょう。ひとたび液体が凝固し始めるとき、液状そのものはガスの場合と同様に消滅するからです。

以下は発生する物事の好例です。われわれが美しく晴れた空をながめる場合、ただ空が見えるだけです。しかし自分と青空とのあいだには酸素、水素などの目に見えない元素がいくつもあることをわれわれは知っています。しかしひとたびそれらが活動を始めると雲が現われます。そして雲の活動が始まるとそれは再び元の状態に戻り、ついには全く見えなくなって元のガスになります。

しかしここにおいてさえも、何かの変化が元のガス類のあいだに起こったと考えてよいでしょう。

しかしもし雲がその活動を続けることによって濃密になるならば、大気はしめっぽくなり始めます。というのはこんどはガスは液状になってきて、水分が地上に落ち始めるからです。これは二度目の活動の領域です。

ここに引用した事柄をはっきりさせるために、液体が固体に変化する際の物体の創造を例証しましょう。一滴の水が土塊に付着しますと土の中へ水を吸収します。更にも少量の水に土塊の表面をゆっくりと流れさせると、土は水のほとんどを吸収します。液体は消滅して泥のかたまりができます。それはもはや液体ではなく、かたまりをなすために土を含んでいる水分です。もし入手し得る限りの土すべてを吸収するほどの液体があるとするとならば、このかたまりがどんなに大きくなるかはいうまでもありません。

土の分子すべては芽や種子ばかりでなく、無機物をも生み出す可能性のある種々のガスで成り立っています。そしてひとたび適当な条件が与えられれば、右以外の物をも生み出すことが可能です。最初の段階から現在の段階に至るまで、さまざまの度合に活動は続き、それが多くの変化を生み出すわけです。

何らかの源泉から起こった活動が存在する所には必ずエネルギーも存在することをわれわれは知っています。そしてこのエネルギーを摩擦、静電気、または運動エネルギーなどと分類しています。このエネルギーは雲が形成されてかなりの速度で動いている静電気を帯びるときに見られます。そして十分に充電されると、

雲は電光のかたちでこのエネルギーを放出します。もし二つまたはそれ以上の雲が互いに放電し合って二本の電線のようにエネルギーの交叉した線ができるならば、その交点にせん光と爆発が生じます。これがいわゆる雷光です。この雷光は地上で知られている無機物のほとんどを含んでいます。雲の放電に先立って、雲と雲とのあいだには明らかにただの空間しかなかったのですが、交点の所には雷光を生じさせる何かがあったにちがひありません。つまり必要な要素がそこにあつたのであって、それを雷光のかたちにするのに、適当な条件を必要としたにすぎません。

これだけでも空間は各種の要素から成っている証拠となります。この要素が人間に知られている多くの形態を生み出すのであって、各形態は要素の結合の仕方次第でできるというだけのことです。前述のように個体の出生地は空間にあるといえます。不思議なのは、崩壊として知られている法則は出生の法則ともいえることです。なぜなら形態の如何にかかわらず崩壊が起こるとき、最初それを作り上げた要素は元の状態に戻ってゆくからです。

あらゆるガス類はいくども周期をくり返してゆく可能性を帯びています。自然界の万物はこのくり返しをやっているように見えます。そのことは元の状態にあるガス類は不変であるように見えますが、一方個体は発生したり消滅したりしているのです。この現象のすべては、われわれが速度または振動数ともいえるさまざまな度合でもって絶えざる活動のなかに起こります。

創造の根本的な力すなわち「因」は不変です。一方、現象すなわち「果」の結果は変わりやすく無常なものです。このすべてはいろいろの振動または速度によって支配されていて、変化しながら絶

えず新しい結果を生み出します。そしてその結果のいずれも他にあって重要です。

こうなると、最初の領域や、無の中から形ある現象になるのがどうして可能なかがあなたには理解できると思います。しかし読者はなおも尋ねるかもしれません。「そのガス類は始めにどこから出て来たのか?」「各種のガスが次々と化合したり反発したりする場合に、吸引と反発の生きた法則をいったいだれが、また何が定めたのか?」

最初の二つの段階においては或る種の英知が現象の背後の指令者であつたことをすでに述べました。

われわれは表現または「現われ方」を基礎として知能の段階を分類していません。現われ方、われわれは人がいかに立派に自分を表現するか、またはいかに立派に物を作り出したり、行動したりするかによって人間の知能の程度を計っているではありませんか。ですから個人が社会の標準に達していなければその人は低能と呼ばれます。結果（複数）を生み出すのに一そう秩序あるように見えるこのような現われ方は、知性の代表者である人間にとって迷惑にならないでしょうか。それはむしろ迷惑なことです。そして先へ進むにしたがってこのことがもっとよくわかってくるでしょう（訳注。だから他人を低能だと呼ばないほうがよいの意）。しかしこのことは万物を支配する宇宙の法則ばかりでなく、全体的な宇宙の英知が存在することを示しています。そしてこの英知は形態を必要としません。なぜなら英知自体がいるという目的のために万物の内部に具体化しているからです。そしてガスや無機物を通じて万物はこの英知に従っているのですが、

人間だけは別です。

英知に身をゆだねている物はすべて絶えず存在の状態にあるという証拠があります。そしてこうした物質は常に高次な表現の状態に精化され、万物に役立ち、かくして宇宙の目的を遂行します。これが事実であることをわれわれは知っています。というのは、物質でできている地球は数十億年間存在し、多くの変化を経てきました。しかし人間の諸文明は興亡をくり返しています。一文明は創造者の意志のもとに続き、他の文明は人間の心の意志によって終滅します。これは人間を作り出す材料が消滅することを意味するでもなければ、意識に終わりがあることを意味するでもありません。エゴの心が宇宙の英知を離れて行動したいと主張するときに終滅があるのです。永続する唯一のものは、宇宙の意識と材料なのであって、これは絶えまなき活動と更新の過程を通じて働いています。

しかし人体さえも進化しています。これは人体を作り上げる材料自体が宇宙の意志に自らをゆだねて進歩し続けているためです。そして人体を作り上げている材料は心またはエゴに或る種の影響を与えています。それゆえ心も多少は進歩しているのです。つまりそれは心自身の意志で進歩するのではなく、肉体の英知が心に働きかける部分があるために進歩するのです。

たとえば生命体の体験の記憶は、その個体の細胞内の各分子内に記録されるということを最近科学者が発見しています。人体は無数の細胞から成っています。また各細胞は無数の分子から成っていて、これが過去・現在の活動の記憶の型や未来の活動のための記憶の型を運んでいるのです。これらの分子は肉体の多数の部

分に役立つために一団となっているのです。これらの分子は個人の肉体と心が行なつた進歩の記憶を運ぶのみならず、想像し得る限りの最低の段階から現在に至るあらゆる成分の記憶を運びます。これは、意識として知られる記憶分子によって導かれる個体生長の基礎であるといつてよいでしょう。これで一つの手がかりが与えられます。すなわち、右の分子群から確実に与えられている意識的な印象類に自分のせんさく好きな心を服従させる方法を会得している意識的な警戒性を持つ人は多くの知識を感受することが可能であるという事実がわかつてくるのです。

われわれはサイコメトリー（訳注。物品に触れてその性質などを察知する神秘力）に関して多少とも知っています。それによると、この術に長じた人は他人の所有物である指輪か時計を手にとって、所有者にリーディングを与えます。（訳注。物品の由来・性質などに関する知識を与えること。たとえばこの指輪はニセモノのルビーで、いつ、どこで、いくらで買って、だれの手を転々と渡ってきたかをいい当てたりすること）こうした特殊な人々は何ら疑惑を起こすことなく、やって来る印象類を感受するように自分を訓練しています。そしてこの印象類はこれまでに体験を持ってきた分子から振動となつてやって来ます。

この微小な記憶分子は実際には人体を維持し心を指導する意識の実体です。それらはかつて存在した、またはいま存在しているすべての物を、知る者です。このことで、ひとたび正しく訓練された人間の心は自然界の万物と交わることができることを示しています。そして生命に関するさまざまな神秘はもはや増大しません。秘密も推測も存在しなくなります。なぜならこの微小な記憶

分子群がすべての活動を記録しているからです。

これは真の、宇宙的な自我^①です。この発見は他の惑星の兄弟の援助によって行なわれてきたのですが、地球の科学者はその価値や潜在性に気づいていません。一部の科学者はそれをDNA (deoxyribonucleic acid) 及びRNA (ribonucleic acid) と名づけています。しかるに他の惑星の兄弟たちはこの知識をすでに数千年間応用してきたのです。そして彼らはこの、記憶の運び手(記憶分子)からやって来る印象類に自分の心を服従させるように訓練してそれを日常生活に応用しています。

科学者によればDNAは生命の指示法の描かれた青写真原図であるということです。人間にせよ昆虫にせよ何かの生命体を一考したことがある人は、その個体の構造を指示する或る種の英知が存在することを認めるにちがひありません。全く等しい二つの個体は存在しないのですから、あらゆる場合に小さな変化があることがわかります。そして個体を作る際に用いられる材料は指示を受けるために或る種の知性を持たねばならぬこともわかります。

進化した惑星上ならば、生命の研究において、おそらくDNAの半分は女性部分と考えられ、他の半分は男性部分と考えられるでしょう。この二つの部分のあいだには不変の関係があつて、それはRNAと呼ばれる使者を生み出します。この使者が個体の型に応じて遺伝の情報または種に関する指示を与えます。これでおわかりのように、三位一体が存在するのです。DNAの二面とRNAの一面です。また、DNAの二面は種に関するメッセージを帯びたRNAを生み出すこともわかります。

一個体中の陽子群は使者を作り出すのにきわめて重要です。科学でBと呼ばれるハイ種すなわちCOLIは各個体の膜内で繁殖しますが、これはリブソンといわれています。各個体は食物で養う必要がありますので、食物は陽子群(訳注。陽子群というのは少々変だが、原文にはそう書いてある)や他の必要成分に変えられねばなりません。この手順すべては化学的なものであつて、科学によれば明らかにリブソンが普遍的な翻訳者として働いています。

個体中の細胞は特殊な目的(複数)のために集団化しています。たとえば心臓を作るために用いられる細胞は脳その他を作るために用いられません。しかしどの細胞集団も特殊な目的のための完全な個体の現われを生み出すために互いに調和し合っています。

私が記憶と遺伝に関して科学的な発見のこの部分を引用するのは、このタイプの知性は心とは別個に働いていることを示すためです。しかし心は協力するためにそのことを知らねばなりません。こんなふうにして過去に何が起こったか、現在何が起こりつつあるかを心が知るわけです。

この問題に関して進化した惑星人が用いている装置類や図表などによって私が目撃した事柄を述べてみましょう。彼らの用いている方法は、地球の科学者のそれよりも簡単で、理解しやすくできています。一例として二本の平行線をあげましょう。一本は白で他は黒です。白い方は男性を表わし、黒い方は女性を表わします。そして一定の時間的間隔をおいて二本の線は数字の8という字の形で互いに交叉します。そして二本は絶えず能動的で、8という字形のなかに両者は目的に応じて七ないし九種類の異なる

結合状態を生じます。こうした輪状を作った後、特殊なメッセージを帯びた使者が生まれます。この使者は次の段階がどのようになるかの設計図を持っていますが、自身を過去から切り離すことはしません。ここにおいて記憶が運ばれるのです記憶こそは永遠性を持つ、人間または他の個体の唯一の部分です。なぜなら人間は記憶なくして人間たり得ないからです。この過程によって過去の記憶は現在の体験としてかりつながら起ることがわかります。そしてこのすべては人間界とは別個に起こります。

これが、人間の「意志」が右の過程の「意志」に身をゆだねなければならぬ理由です。ただし前者が後者の正体やその存在の理由を知ろうとするならばです。私は、右の知識の一端にやっと到達したにすぎない地球の科学に関連して以上の事柄を伝えました。前述のように宇宙人は数千年間右の知識を持っていて、それを応用しています。人間が真の自我を知ろうとすれば右の知識は根本的に重要です。右の知識の中に生命の絶対的な確実性があるからです。

われわれはみな自分の肉体内で何が起っているかについてほとんど知っていないという事実を認めねばなりません。しかし或る種の知識が肉体を通じて働いていて、「どうしたらよいか」を心は知らないのに肉体は知っているとかがわれわれにはわかっています。ゆえに心はこのことを既成事実として盲目的に受け入れてきたわけです。しかし心が調和的なおだやかな状態を保とうとすれば、人体内で起る物事のすべてを知ることが心の義務であり特権であるのです。こうして心自らが創造された目的を果たし、不安によってひき起こされた混乱と恐怖によってもたら

された諸状態を排除することができるとはなりません。そのとき心は今日やっているような過失をくり返さないでしよう。

心というものは人体内の意識的な英知の働きにほとんど気づいていないということはおわかりでしょう。われわれが眠っているとき、意識は人体を働かせますが、心は何も知りません。こうして、決して休むことのない或る種の英知が存在することが実証できます。だから心も「知る者」となるためにはこの英知と一体化しなければなりません。これが達成されると人間は現在耐え忍んでいる不快な生活のすべてを解消するでしょう。そして人間はあらゆる個体内で起っている物事やその目的を知るようになります。区分というものははや不可解事をひき起こさなくなるでしょう。

この大いなる英知と共に働くに際して宇宙人が用いる方法は、心のかわりに自己の意識でもって万物を観察することにあります。わかりやすいえば、彼らは観察される個体があたかも自分であるかのようにその個体について意識的になるのです。たしかに相手は自分であるのです。全体から切り離された物は何も無いからです。こんなふうにして一つの心としての人間は全体と融合するのです。

人間が一定の規準としなければならぬようなパターン(型)は存在しません。全く等しい二人の人間は存在しないからです。したがって本講座は他の修養団体のごとく一定の信条を設けたりはしません。ただあなたの内部で働いている意識的な英知に気づくようになればよいのです。そうすればこれはあなたの思考上の習慣となるでしょう。そして心と英知(意識)とは今日見られるよ

うな二つの分離体としてでなく、一体化するでしょう。これが宇宙人が進化した方法であって、そのゆえに彼らは言葉を発しないで万物と会話を交わすことができるのです。

われわれが自己の何たるかを知ろうとすれば、宇宙人の用いているのと同じ方法を用いなければなりません。ただ一つ銘記しなければならぬのは、われわれは「好き嫌い」に従って他人を非難したり、分割したり、排他的になったり、怨んだりしてはいけないということです。一度あなたが「記憶の芽」から来る印象類をキャッチするならば、あらゆる種類の印象が来るでしょう。その印象類の中にはあなたにとって好ましくないものもあるでしょうし、恐ろしいものもあるでしょう。それは、この地球上にはきわめて低い段階の生命現象があるからです。しかしこうした低い現象もなければ生命界は完全になりません。あらゆる面が必要であるからです。しかしそれらが一度理解されると、それらに対する非難は停止します。これは（生命界の低い段階は）ちょうど残酷な場面が展開される舞台上の演劇のようなもので、これがないと生命の各面が真に表現されないことになります。

大きな魚が小さな魚をのみ込むのを見るのは、われわれにとつて残酷に思われますが、それは人間がニンジンを食べるのを見るのが残酷だというのと同じです。なぜならニンジンも人間や魚と同様に分子からできていて生きている生きものであるからです。しかもこの記憶の運び手（分子）は最も残酷なものから最高に至るまでの生命のあらゆる面の記録を持っています。

これがときとして二元性の起こってくる理由です。あなたは或る人を深く愛しながら、しかもその人を傷つけることがあるでし

よう。この矛盾は低い性質及び高い性質の各記憶細胞によって起こります。もしわれわれが自分の自我について多少とも知っていたら、この二つの記憶細胞を調和させるところですが、普通はそうしないで両極端に分けて、いずれか一方を支持しようとしています。こうした理解力の不足が不可解や考え違いを起こす原因となっています。人間はみな同じ存在ですから、他人を傷つければ自分を傷つけることになります。これはわれわれの心がすぐれた触媒作用をなすように訓練されていないためです。これは心が生命の存在理由を知っているときにのみなされるのです。

われわれが創造者のようになるうと思えば、われわれは率直に生命界のあらゆる面を見なければなりません。創造者は何らの區別をすることなく創造物を見つめています。創造者が或る物を好み、或る物を嫌ったりすれば、創造者自身を分裂させることになります。人間以上にすぐれた業績をあげることはできません。しかしあらゆる段階の創造物はその創造者によって愛されています。各創造物の目的が知られているからです。差別待遇をするのは人間だけの特徴であって、これによって多くの苦痛が生じていますが、これはエゴの心が自身を全体から離れているためです。

リンゴは物質でできていて、人間と同様に意識的な生命によって支えられています。われわれがそれに食いついても悲鳴をあげたりしません。なぜでしょう？ その理由は、宇宙の法則にたいして絶えず反抗的な自由意志なるものを与えられた人間の持っているような「心」をリンゴは持たないからです。

人間も肉体的な苦痛を感じないようになれるのでしょうか？ ありません。焼けている石炭上をハダシで歩いてしかも何ともない人

— 推せん図書 —

◎隔月刊円盤研究誌(英文) **FLYING SAUCER REVIEW**
 一年分購読料・英貨1ポンド6シリング 発行所・Flying Saucer Service Ltd., 72-78 Fleet Street, LONDON, E. C. 4 英国の有名な円盤研究誌で、これを読めば大体の状況はわかる。独断と偏見を排した冷静かつ客観的な編集態度を持ち、有益な記事を満載す。注文は下記のタトル商会が発注と送金手続きを代理している。誌代はさほど高価ではないが送料として船便と航空便とに大差がある。詳細はタトル商会へ照会されたい。チャールズ・E・タトル商会 東京都文京区江戸川町15

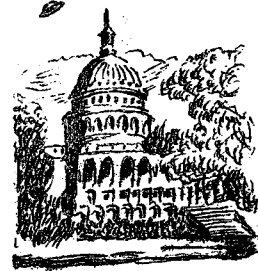
◎月刊円盤研究誌(英文) **NICAP REPORTER**
 一年分購読料・海外2ドル25セント 発行所・MR. ROBERT J. GRIBBLE, 5108 South Findlay Street, Seattle, Washington, 98118 米国NICAP(空中現象調査委員会の略称。ニキャップと読む)発行の公的な機関誌。目撃事件類の記事を主としたもの。これもタトル商会で扱う筈。

◎橋本 健著 "超心理学入門" 300円 東京都千代田区神田佐久間町1-11、産報KK発行 振替・東京36786 心が物質に及ぼす影響、想念の力、心靈現象などについて平易に科学的に説いた良書。書店で入手できなければ杉並区天沼1-24の著者宅へ送料共(20ペーシ続)

が存在したりします。この人たちは心の訓練の仕方を心得ているのであって、心は訓練されるために率直である必要があったので。これでもってわかるのは、心がいかに不快な状態に直面しようとも、それは法則の誤用によって心自身が作り出すのであるという事実です。それゆえ、生命がさし出すもろもろの祝福を樂しもうとすれば、心は宇宙の原理の自発的な探究者になる必要がありません。こうして、人間の積んだ体験によって本人が得た価値を思い出す際に、過去からの記憶が役立つのです。

(第四課終わり)

最近の情報



C・アダムスキー

過去三ヶ月間に多くの物事が起こりました。そこで先ず米国東部における最近の私の講演旅行に関して報告しましょう。これはかつてないほどに成功した講演でした。メリーランド州シルヴァースプリングズのロードファー夫人、ニューヨークのジェサップ夫人、ニューヨーク州のダイクマン夫人、イリノイ州オーローラのウールコット氏など、すべてが私の旅行を成功させるためにすばらしい仕事をやってくれました。

ロードファー夫人は会の進行をうまくとめてくれましたので、これは賞賛に値します。われわれは初めてワシントンから来た多くのラジオ・テレビの放送関係者に接しました。これは著しい反響を呼び起こしました。このことは未来にたいして大きな可能性を持つものです。

私以外の惑星から来た一機の宇宙船を撮影したフィルムは目下ワシントンのABC放送局に保管してあります。今秋の大統領選

G.A's Cosmic Bulletin - June

が終了したあとでそれを放送することになっています。これには解説が付けられる筈です。このカラー映画は私たちがウィスタ（訳注。ケアリフォニア州の小都市）に引越してから撮影されたものです。画面に出てくる葉巻型宇宙船はパロマー山の近くからやって来ました。これに関してワシントン右のテレビ局の支配人が語った言葉を再録しましょう。「これは前代未聞の、最もすばらしい、最も信頼し得る記録映画だ。どこの放送局がこれを手しても米国全土へ放送するだろう。」

五月十八日に私はメキシコ市へ飛び、そこで友人たちに会いました。またサンホセプアルアで少時をすごしましたが、ここでは彼らはミネラル水を飲んで健康を保っています。

メキシコで行なわれた或る公式会議に出席させるために、他の惑星の人々を乗せた多数の宇宙船が最近飛来しましたが、この国で報導された最近の宇宙船目撃事件は、実はその船団の一部が原因をなしていたのです。金星が地球に接近するこれから六ヶ月ないし九ヶ月先には（訳注。金星の近地点は今年十一月六日）、宇宙船の目撃事件がもっとふえるでしょう。そしてこれら宇宙船のほとんどはおそらく金星から来るでしょう。

私がメキシコで宇宙人たちに会ったとき、彼らの宇宙船の大型の写真をなぜ撮らせないのであるかと尋ねたら、その理由はアイデンティフィケーション（訳注。或る人物または物品の写真などを見て身元証明をしたりホンモノと確認したりすること）に支障があるからだということでした。地球人にはその能力がないからだということでした。

その会議の指導者たちは一日間メキシコ市にいました。私が集

め得た情報から判断しますと、その目的はメキシコ政府関係者と
の会合を開くことにあったようです。サンホセプアラはメキシコ
市からあまり遠方ではありません。それがメキシコの会議の理由
だったのでしょうか。

メキシコのマテオ大統領がケアリフォニア州でジョンソン大
統領と会見したとき、マ大統領は宇宙の平和と世界人類の尊厳さ
の認識を願うと表明しました。この声明は金星人や土星人のいっ
ていることとほとんど同じです。私はそのとき第六チャヌルでそ
の話を聴きましたが、もし彼の姿がテレビに写っていなかったら
宇宙人が語っていると思っただかもしれません。こんなわけで、彼
の言葉は宇宙人が語ってくれた話にきわめてよく似ていました。驚
かりにマ大統領が宇宙人とコンタクトしていたとしても私なら驚
きはしません。多数の国の指導者もコンタクトしているからです。
しかしマ大統領は進化した他の惑星に存在するような理想的社会
の出現を要望してそれを公然と説いた唯一の人です。ただ彼の公
職在任期間が終わろうとしているのは残念なことです。だが彼の
後継者は彼の理想を引き継ぐものと思います。その目的で宇宙人
の忠告者がメキシコへ行ったのだと私は信じています。

右の会議では多くの議題が討論されましたが、そのすべてを目
下洩らすことはできません。討論の内容のほとんどはこの太陽系
を扱ったものでした。みなもご存知のように、太陽系はこの数年
間次第に変化しつつあります。変化は緩慢で、全惑星群に影響を
及ぼす最後の結果はまだわかっていません。

少し前に、天文学者は標準時計を一分間逆戻しさせたと報じま
した。地球の自転速度がそれだけ遅れてきたというわけです。し

かし宇宙人は一分四十五秒遅れたといっています。地球は時速一千マイル以上で宇宙空間を自転しているのですが、そのごく僅少な遅れでさえも多くの変化を起こしています。すなわち世界中の気象に影響を与え、より多くの火山活動や地震などを発生させるでしょう。大地にたいする圧力にわずかな差があつて、地中の弱点が暴露してくるからです。もし自転の遅れが続くならば、われわれは面白くない状態を期待しなければなりません。

科学上の装置では、この遅れが小さな変化かそれとも永続的なものかはまだわかりません。

もし地球の自転が七分ほど遅れるようになれば、それは太陽系が崩壊しかかっていることを意味します。しかし目下のあらゆる徴候からみて、これはまだだいぶ先のことになるでしょう。

地球の核爆発が地球自転を遅くするのを助長したということが会議で指摘されました。地球にたいして核爆発の反応はブレイキのような作用をしたのです。これは機体を推進させるジェット機の噴射のようなものです。

こんなことをいえば妙に聞こえるかもしれませんが、核爆発は建設的に用いられれば価値があるということを技術者は知っていて、破壊的に用いられれば危険だということもわかっているのに、現在この世界は技術的な世界を築き上げているのです。ところが核爆発のほとんどは破壊的に用いられているのですから、これはきわめて危険性を帯びています。ところが大抵の技術者は結果がどうなるかを知らないで実験しています。彼らは人間性無視の連鎖反应的慣例を具体化させたことになるともいえます。レムリアやアトランティスのごとき大昔の文明もこれをやっています。それ

らは科学的または制限された技術的知識でもって自身を破壊したからです。この地球の文明も破壊的な分野で持続するならば、もつとひどいことになる可能性があります。もし地球が核爆発の実験で現在一分四十五秒も遅らせていて、この上遅らせ続けるならば、この惑星を破壊することになるでしょう。すると太陽系をアンバランスにし、その終滅をもたらすこととなります。現在この地球にたいする影響は変化する諸状態のほんの一面にすぎません。

それに次ぐ影響は世界中の人間にたいして起こっています。不安感がすでにその証人となっています。ごくわずかないらだちが人間同志を対立させるでしょう。地球が自転を遅らせ続けるならば、不安と狂気が増大するでしょう。人体は地球の無機物で作られているので、人間が自己を支配し得る宇宙の性質を帯びた法則を学ばない限り、いかなる変化でも必ず人間に影響を与えます。いいかえれば元素に支配されないで元素の主人になるのです。さもないと人間は、地球は存続しても自分を破壊することになるでしょう。現在の徴候は自滅の方向にあります。なぜなら人間のエゴはあらゆる自然の法則の上位にそれ自体を置いているからです。その法則に従って生きないで、人間はいまそれに反抗して働いています。「自然が人間にそむかないように気をつけよ」とこれほでいわれてきました。人間は宇宙の原理に背を向けてしかもレムリア人やアトランティス人以上に生き伸びることはできません。以上が前記の会議に関してお伝えできるすべてです。

さて、東部とメキシコで出された質問類に答えましょう。一つは私が過去に関係した刊行物に関するものです。(訳注。戦前やっていた哲学と現在のそれとの関係を聞かれた質問) たしかに私

は一九二五年以来教えてきました。そして一時私の教えは、ロイアル・オーダー・オヴ・ティベツトの名称で二種類のラジオ放送局から放送されました。私のグループ活動は法的に名称を必要としましたので、この団体名が選ばれました。この教えというのは精神科学と哲学に関するものでした。ところで宇宙の原理は不変ですが、その応用の仕方は人間が学ぶにつれて変わってきます。知識において人間が学んだり生長したりする必要のない時は決してありません。これによって進歩がなされるからです。したがって当時応用された原理が現在も応用されるというのは実際にはあり得ることです。しかし宇宙人は法則のもとと簡明な応用法をわれわれに示しています。目下それを用いるのに重要な段階にあるからです。過去においてわれわれは天と地とを扱っていましたが、いまは宇宙がより大いなる知識へのドアを開いています。昔の知識の探究は制限されていましたが、いまわれわれは宇宙人のおかげで全体を探究しています。

かつて人間は物資を牛車で輸送していましたが、現代は空輸しています。こうして人間は進歩したのです。原理は依然として同じなのですが、人間に役立つ応用法ははるかに容易な急速なものとなっています。しかし進歩に終わりはありません。愚鈍のみが進歩を疑問視するのであって、それは一カ所に停滞しているのですが、英知はいつまでも前進します。だから或る人々は私が変化したということです。進歩は変化なのです。疑問視する人は進歩を見ることのできないためにジツと立ちどまっているにちがひありません。私は決して変化し続けることをやめないで、しかも原理という確固たる基礎の上に立っていたいと思います。

別な質問は次のようなものでした。「なぜ或るグループ（複数）はあなたを落とし入れようとしたのか？」

こうした妨害があったことは私が教えを始めて以来の事実です。人間が自分の力で考えることを刺激した進歩的な思想を私が提供したからです。こうした妨害は宇宙人が私にコンタクトして以来更に激烈になっています。それで、この人だけは間違いないと思っていた最も親しい友人たちでさえも反対派についてしまいました。

別な質問。「あなたは助手を必要とするといったのに、それが提供されると拒絶する。なぜか？」

私が必要とする種類の助手を持つためには、本人が私に助する或る知識を持つ必要があります。つまり私が口述する際には助手たる人はその真の意味をつかまねばなりません。または私が不在であるときは助手が私に代わって仕事ができなければなりません。私はかつて一緒にいた人に（訳注。ルーシー・マクギニスの意味する）本人が望むならば一つのチャンスを与えようとしていました。しかしいまは別な優秀な人物を選ばねばならぬ段階にきています。宇宙人はこのような人物を知っていて、この仕事のために目下本人を指導しています。この女性は現在所有している身の保障のすべてを喜んであきらめ、真の保障として宇宙を頼りにしようとしています。彼女がそれを学び取るのは困難ではないでしょう。

身の保障といえは、その意味はいったい何でしょう？ この人生は永遠の中の一瞬にすぎません。人間の保障もそれと同じです。永遠に進歩する生命こそ、本人がどこへ行こうとも、どこで生ま

れかわらうともついて歩く唯一の永続的な保障です。

私自身を例にあげてみましょう。私は一般人が求めようとして躍起になっているような保障を持ってはいませんが、人が必要とする物は何でも持っています。私はまだ金の支払ってない美しい家に住んでいます。しかし私がそこを離れねばならぬ場合はその家を持って行くことはできません。したがって問題となるのはただ現在の便利さだけで、それを私は持っているというわけです。私が持つて行ける唯一の物は、創造者の目的に役立つことによつて得たかもしれない信用です。この信用は永遠を通じて持続するのであって、これこそ唯一の永続的な保障なのです。金星ではカ

ネというものを使用しないのですから、金星へカネを持ち運んでどれほどの価値があるでしょう。しかし私が身につけた宇宙的な知識は大いなる助けとなるでしょう。七十三才を数えるこれまでの生涯において私は欠乏したことはありません。これは私の必要とする物を私よりも創造者がよく知っていて、この世界での私の晩年において最も必要とする物を供給したまうのだという信念を私が持っているためです。創造者に役立つことと、多数の人を傷つけるかもしれない物質の富を蓄積することと、どちらがよいでしょう？ 私は創造者への奉仕が人間に必要とされる唯一の奉仕であることを身をもって証明しています。創造者からの報いは人間のそれよりも大きいのです。

さてGAPの活動について一つ報告しておきましょう。私たちはベルギーからメイ・モーレーとその夫モーリスの二週間にわたる訪問を受けて楽しくすごしました。多くの話題が出た後、彼らは、ベルギーGAPのために豊富な情報をたずさえて帰国しま

した。夫妻はベルギーで新たに研究団体を設立しようとしており今年か来年私を招待したがつています。東洋への訪問計画も立てられていて、来年は忙しくなりそうです。(訳注。これは日本訪問を意味する)

私は世界中に多くの新しい協力者を得たことをうれしく思っています。その内の二人は米国にいる人で、メリーランド州シルヴァアリスプリングズのロッドファー夫人とウイスコンシン州アプルトンのシャーロット・ブロップ夫人です。二人ともすでにすばらしい仕事をやってくれました。ブロップ夫人は多数の大学生や教授に関心を持たせて、今秋彼らに私が講演をする手筈をととのえています。

メキシコにいたあいだ私は団体の設立について話し合いました。これはグアダハラハラとチャバラの付近に学園を建設しようとするメキシコGAPのマリア・クリステイーナ・デ・ルエダ夫人を助けるための建設準備会です。これが実現すれば私はメキシコで六ヵ月間教え、あとの六ヵ月は米国ですごすことになりました。

宇宙哲学を体得した人に必要なのは広範囲な活動性です。私は基礎工事を完了しましたが、私がこの世にいらなくなった場合に、それを引き継ぐ人たちがいなければなりません。

この「生命の科学」講座といえは、それをただ読んだばかりでなく日常生活に応用した人たちはいわゆる奇跡を体験しているというところで、そのことをここで報告できることをうれしく思います。宇宙人たちも私もこれを非常に喜んでいきます。たぶんその研究グループから必要な指導者が得られるでしょう。創造者の仕事は停止しない限り多数の人にとっての必要物(指導者)は存在す

ようです。

私の旅行中に奇妙な出来事が少々発生しました。シルヴァースプリングズで私は政府関係者や各官庁に講演をするようにと依頼を受けました。私は「原子力委員会」に属する「一人の男」ときわめて興味ある話をしたので。更に「スペース・プログラム」と関係のある一団の人々と全く愉快な話をしました。すばらしかったのは予備空軍の将兵との会合で、高官が出席しました。ロードファート夫人は私がこの会合で行なった講演を録音しました。空軍もテープレコーダーを持参し、しかもそれで録音することを秘密にしている、機械を隠していたのです。ところが、あとでテープを再生しようとしたところ、何も録音されていなかったといので、私の方に録音テープがあればそれをコピーしたいから貸してくれといってきました。そこで貸すことにしましたが、空軍は最初彼らのテープレコーダーをテストしてみても大丈夫だったので、どうして録音しなかったのかわからないといっていました。始めにテープに録音してあった少佐の声までが消えていたということです。これは私という人物と、どんな種類の力を用いられたかということについて、ちょっとした神秘的な事件となりました。しかし空軍はこの次私がワシントンへ行つたときまた講演してくれと依頼してきています。

私がニューヨークにいたあいだ、小さなグッドゥー教の人形が私宛に送られてきました。(訳注。グッドゥー教は西インド諸島及び米国南部の黒人間に行なわれる迷信的慣行で、魔法、まじない、ヘビ崇拜、人身御供などを含み、特に人形を作って憎悪の対象を呪う)その人形にはピンが突き刺してあって、顔は私に似せ

てありました。ロサンジェルスから送って来たのです。私はただちにそれをこわして、反対派がなおも暗躍していることを示すためにそのことを話しました。

またメキシコにいたとき、新聞記者たちが私の写真を撮りました。周囲の景色はよく写っていましたが、私の姿は写っていないで、私が立っていた個所には白い光があるだけでした。これは別な神秘です。

ところで私の家で発生した興味深い出来事について話しましょう。或る午後、一人の若い男が我が家へやってきました。彼はオシでツンボだったのです。相手は質問を書きましたので、私は家の者に回答を書かせました。こうしたことをちょっとくり返してから、私はこの男は自分の意識でもって話すことも聴くこともできのだと念じてやりました。すると彼の顔は晴れやかになり、私の心中を察したかのようにうなずきました。そして家を去る前にはもう耳が聴こえるようになり、少しばかり言葉を口に出していました。このことは、われわれが真剣に宇宙の兄弟と共に働くならば、不可能な事はないという事実を示しています。意識とは宇宙の言語であることを理解するなら、なおさらそうです。

建設的な推論

科学界では多くの賛否両論が行なわれていますので、人々は次々起こる出来事を建設的に論理的に推論するように仕向けられています。推理はハメ絵パズルのようなもので、その絵を組み合わせるには組織的、論理的なパターンを用いる必要があります。それ

を用いなければ自分がひどく混乱し、うまくゆきません。ハメ絵と同様に、組み合わせてみればよくできた絵もあれば、わるいのもあります。それを他人にやってもらいながら自分で体験することとはできません。

もしその絵が人間たちを描いたものであるならば、あなたは他の仲間のクツの中へ自分を押し込むようにして懸命に努力し、その場合個人的な自我を排除しなければなりません。A Bの両者に公平な態度を示そうとするからです。特に絵が完成するまでは非難を中止する必要があります。さもないと友人をさえも敵にしてみせます。ゴシップを避けなさい。あなたが長いあいだ或る出来事や関係者を知ってきた場合は特にそうです。ゴシップ屋というものはただ知っているだけで、事実のすべてをつかんではいません。たとえゴシップ屋があなたに訴えて、よい意図を持っているように見えても、それを避けなさい。事の真相を知らず個人関係を知らないで、ゴシップ屋は自分で作っている絵にあてはまるように物事を創作します。たぶん他人を傷つけようという意図はないかもしれませんが、真相を知らないのであって、かくて本人は最も貴い物、すなわち大抵の人が望んでいる、友人^人なるものを失うことになります。そしてついには調和のためにどのような道が開かれていても、本人は関係を復活させることを恐れるか、またはその人に課せられた催眠的な呪文のために、本人は推理の原理と論理的な思考力を失うほどに自分の心を硬化させることになりす。

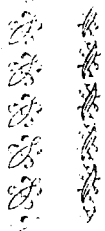
ゆえに神から与えられた最も価値のある贈り物を失わないように、こうした状態に気をつけなさい。結論に飛びつかないで、あ

らゆる言い分を注意深く聴きなさい。何をいわんとしているのか、それを攻撃しようとしているのかを知るために、その説を分析しなさい。もしその説に誤りがあればそれを受け入れないようにしなさい。本人のためにそれを訂正するのは更によいことです。その説が誤っているのをたしかめるには、それを自分自身に応用してみ、好きになれるかどうかを調べてもらいなさい。こんなふうにしてあなたは他人からしてもらいたいと思うことを他人にもすることになるのです。犯された過失に直面することを決して恐れてはいけません。いつまでも傷跡を持ち運ぶよりも、それに直面する方がよいのです。

偉大なのは自己の弱さを克服して勝利をかち取る人です。忘れてならないのは、完成された人間は存在しないこと、そして過失を訂正できるほどにわれわれが成長すれば、過失をおかすことによって学び取るのであるということです。

人々が互いに推理することができなくなり、そのために敵同志になれば、世の中は悪い状態になります。それは自滅への道をたどるだけでしょう。人間同志を結びつけている触媒がなくなるからです。そうなると友人間、兄弟間の対立が起こり、神の似姿は消滅して、また建設的な推論もなくなるでしょう。

(14ページより)
360円を送る電
れは直送され東
由橋本氏は科学
気工学超一流の
で、超心と氏理
と特心で、超心
超名心で、超心
す記の書物に必
精神学は必読の
と著者編者



質疑応答



C. A. ハニ

問1 スプートニク一号が打ち上げられる前に、宇宙人が地球の周囲へ彼らの人工衛星を軌道に乗せたという情報があります。この情報は真実でしょうか？ それは地球の人工衛星に接触しましたか？ (アーカンソ州ブラマヴィル、L. F.)

答 最初のスプートニクが打ち上げられたときより二年以上も前に、地球を廻る軌道に二個の大きな物体が発見されました。一個は時速一万八千マイルで赤道の周囲を廻っており、高度は約六百マイルでした。この衛星がレーダーテストによって偶然に探知されたとき、多数の科学者のあいだに大きな動揺が起こりました。みなは最初それをソ連の打ち上げたものと考えたのですが、いまでもなく地球のものではありませんでした。

また最近数ヶ月間に地球を廻る十三個ほどの物体が発見されましたが、そのいずれも米ソの衛星ではありませんでした。この物体のすべてが他の惑星から来た宇宙船かどうかは私にはわかりませんが、その可能性はあります。

他の惑星から来た宇宙母船が一惑星に接近し—この場合は地球—それが軌道に入ってきて、地球上の或る地域の上空に停止しよるとすれば、スピードと軌道とをつり合わせねばなりません。こ

の宇宙船団の一つが軌道に乗っている限り、それは人工衛星だといえます。こうした宇宙船が再度いなくなると、かつて観測された軌道から急に消滅する物体の不思議な現象を説明します。

あとの質問に関しては直接入手の情報を持っていません。私の個人的意見では、宇宙船はときどき人工衛星を妨害していると思います。宇宙船は少数の人工衛星を停止させたり、軌道に乗せるのに失敗した衛星(一定の情報地球に送り返すよう意図されたもの)を捕えて修理したものと思います。

問2 地球の最初の住民として連れて来られた人々に関する件ですが、彼らはこの太陽系内だけから来たのですか、それとも他の太陽系からも来た人がいますか。(右に同じ)

答 地球上の現在の種族の元となった住民は太陽系の内外から連行されました。現代の人類には骨格上の相違がありますが、これは起源の相違を示しています。この相違は広く分布した起源または始まりの結果です。たとえば黒人の多くはつなぎ目のない頭がい骨を持っていますが、白人にはつなぎ目があります。

問3 かつてあなたは、各国の指導者は宇宙人から「指導」を受けてきたと述べましたが、この指導はいつ始まりましたか？ そうしたコンタクトの最初の噂はアイゼンハワリーの任期中であったと伝えていますか。(右に同じ)

答 宇宙人の指導は米国の形成に役立ちました。ジョージ・ワシントンを含む多数の大統領は、現在米国の指導者を指導しているのと同じ宇宙人たちによって援助されています。このことは、各国は自らの天使を持っていて、それが世話をし、数百年前に立てられた計画にそって国の行手を導こうとすると述べてある聖書の

言葉の真の意味を明らかにしています。各国の指導者は多くの点で宇宙人から「指導」され援助されてきたのですが、だからといって必ずしも指導者たちが相手を宇宙人だと気づいていたわけでもありません。

問4 私は進化論に全面的に賛成できません。しかし進化というものはあるかもしれないと思います。あなたの意見は？（右に同じ）

答 変異のかたちとしての変化は起こりますが、大抵の人が考えているような或る種から別な種へ変化する進化なるものはありません。いいかえれば、一つの種においていかに多くのヴァライアティーが現われようとも、その種はやはり元のままです。ネコはあくまでネコであり、犬は犬で、人間は常に人間です。

人間は数十億年以上もかかって動物界から進化してきたという考えは誤りであるばかりでなくバカらしいことです。ほとんど理解力のない人がこんな説を支持するだけです。

問5 アダムスキー氏の著書によれば、人間は地上に肉体を残すことなくして別な惑星には行けないとあります。アダムスキー氏は自分の肉体を宇宙人に殺してもらって靈魂となって大気圏外へ行ったのですか？（ウィスコンシン州ミルウォォーキー、W・G）

答 ア氏の書物にはそんなことは述べてありません。行く段になれば、だれでも肉体のまま別な惑星へ行けるのです。それに付いて何も心配することはありません。ア氏は次のようにいっています。「この地球を去って高度な惑星に行く場合の正常な径路は肉体の死と生まれかわりである。しかしこのことは肉体のまま行けないという意味ではない。大抵の例の場合は死後他の惑星で生

まれかわるといふにすぎない」

問6 地球人が全般的に他の惑星の人類に気づくようになる時期をあなたは予言できますか。（ミシガン州デアボーン、P・D）

答 私は予言をほとんどしませんが、まだあと少なくとも三年ないし四年間は一般人が右の事柄に気づかないと思います。円盤の知識が大衆に洩らされるということになれば、それは一国だけからでなく国連から公表されるでしょう。

問7 「空飛ぶ円盤同乗記」中に肉体の運動について述べた箇所があります。これはヨガの形式のようなものですか。（ニューヨーク州ヨンカーズ、R・J）

答 大抵の肉体の運動は健康によく、筋肉の調子をととのえます。しかし哲学的、霊的、精神的な属性は筋肉運動によって発達しません。ヨガは哲学的な大系を持っていますが、宇宙人の行なう運動はそうではありません。

問8 夜空に見られる星のような輝く物は何ですか。ときどき位置を変えて、夜ごとに新しい位置に現われます。四月中は日没時に頭上にありました。星としては明るすぎるし、星のように行動しません。何でしょう？（テキサス州キングズビル、A・M・C）

答 それは金星です。金星は太陽を廻る軌道や地球の回転などによって夜ごとに位置を変えます。望遠鏡でのぞいて見ますと金星は三日月のように見えます。或る月には早朝に見え、或る月には夕方に見えます。古代人はそれをルシファーと呼びました。

「ヒューズ・タイ・ジェント」

ニューメキシコになおも円盤が出現

〔オーブクアーク(ニューメキシコ州)AP〕ニューメキシコ州の空に出現する不思議な物体の目撃報告が増加するため、官憲はその調査に多忙をきわめている。嘲笑されるのを恐れて氏名を明らかにしなかった一人の男が官憲に告げた話によると、四月二十七日夜にラスヴェガス付近で、燃えるような赤い大きな円盤が着陸するのを見た。また、当地付近のエッジウッドの青年ドン・アダムズは二十八日早朝円盤めがけて十二発ほど射ったという。モリアーティの警官トミー・リチャードスの話によれば、右の青年はその物体の下をドライブしていた。急に車をとめて外へ出た彼は物体をねらって十二発射ったがだめだったという。ライフルとピストルのいずれを使用したかは明らかにしなかった。(ロサンジェルズ・タイムズ紙、六四年四月二十九日付)

円盤、車と腕をこがす

サウスキャロライナ州ウェルフォードの男が奇妙な話をした。それによると、一個の空飛ぶ物体が六月二十九日の夜、ジョージア州のハイウェイで彼の車の上に急降下して、塗料をこがしたり腕をやけどさせたりしたという。本人ビニーフォード・パーハムはいう。「あまりにはっきりと見たので、自分でもその物を作れ

ると思う」

その体験談は次のとおりだ。彼はアトランタへの仕事に行っている途中で、ジョージア州ラヴォニアの付近にさしかかった。そのとき円形の物体がサーッと降りてきて、車の上空に鳥のように停止した。

「私は時速六十五ないし七十マイルで走っていましたが、その物が来るとエンジンが弱り始めました。大きさは私の車の屋根ほどで、高さは約六フィート。車のヘッドライトにひきつけられていたようでした。底の部分が一方方向に廻っていて、上部は反対の方向に廻っていました。全体が大きなコマといった感じです」

フアミリー・レコード・プラン、社のスパータンバーグ地区支配人であるパーハム氏は、腕が焼けた上に、その物は車のクロームの部分に或る物質を落とした。その円盤は空中の高所から下降しながら二度のすれ違いをやった。始めはヘッドライトの前に停止した後、車の屋根の上をかすめて、そのときよいにおいの液体のような香料のごときものを落とした。

二度目のすれ違いで、その物体は再びヘッドライトにひかれて約二マイル車について来た。三度目のすれ違いのときパーハム氏は車をとめてライトを消した。するとその物は急速に飛び去って消えていった。

その円盤はおそろしい熱を放った。そして氏は数個の丸窓を通して内部の黄色の照明を見ることができた。外側のフチのまわりには魚のヒレのような付属物があった。

「私はラヴォニアへ向かって車を飛ばしていました。たしかに腕はヤケドしていました。どんなに恐ろしかったことか」

サウスキャロライナ州アングサン空港の官憲アルバート・ミリックは他の官憲数名と共にパーハムの車を調べた上、ジョージア州ウォーナーロビンズ空軍基地へこの件を報告した。ミリックの話によれば、パーハムの最新型の車には油のようなシミがついていたという。ガイガーカウンターのテストでは、車は別段放射能をあげた形跡はないことが判明した。(アトランタ・ジャーナル紙六四年七月三日付)

悪臭を放つ円盤

(トコア(ジョージア州)UPI)目下ジョージア州北部の住民たちは、目をサラのようにし、鼻をヒクヒクさせながら悪臭を放つ円盤を警戒している。

最初のUFOは六月三十日の夜、サウスキャロライナ州スパイタンバーグのD・E・ウェルフォードが見た。自動車ほどの大きさで、巨大なコマのような形の物体だった。それは輝かしい光を放ち、鼻持ちのならぬにおいをおびていた。ウェルフォードはサウスキャロライナの州境付近にある米国ハイウェイ二十九号線をドライブ中にその気味のわるい物を目撃したのである。ガイガー・カウンターの調査の結果、自動車の表面に放射能を検出した。

その一週間後に、タルラフォールズのフレッド・ロディカー夫人と数名の近所の人たちが夜遅く前庭で休息していたとき、同様の物体が出現し、たびたび低空へ舞い降りるのが見られたが、この物体もくさいにおいを放っていた。ところがこれから一週間後の次の火曜日に小娘のバティ・アプトンがあわてふためいて自

宅へ走り込んで来た。彼女と友達が見た星をちりばめた夜空の下を自転車で走っていたとき、UFOが低く飛んで来て、しかもくさい匂いがあったという。

この話はたちまち土地の高校生たちを動かした。悪童連の一人であるマイク・ヘッドの語るところによると、彼のグループは望遠鏡、カメラ、テープレコーダーなどを準備して先週の火曜日の夜、付近のカラヒー山へ登り、そこで観測陣をしいた。すると午後十一時頃に、出た出た—くさいやつが！ このUFOは他の目撃例の場合と同じような物体で、急降下して現場から二、五マイルほどダウンした。少年たちは観測にそなえて二個所の無電連絡所を設置し、携帯無線機で連絡したり、観測の様子を録音したりした。

「ぼくたちが見たのは大きな光る物体で、地平線の彼方からやって来ました」どマイクはいろ。

この同じ夜にサウスキャロライナ州アングサン新聞記者ビル・ディルワースも右と同じ物体と思われるものを目撃しているが、この場合は半月形に見えた。低空を急速に飛んでいたという。(オーランド・センチニル紙、六四年七月十六日付)

ワシントン市上空に円盤出現

ワシントン市のフレッド・ステックリング夫妻が三月二十八日午後三時二十分に或るデパートを出たとき、二人は一個の銀色の物体を見たが、それには三個の球形着陸装置がついているのが見えた。(ワシントン・デیلی・ニューズ、六四年六月六日付)

テレパシー講座

5

C・A・ハニー

第五課

これまでに電荷の吸引と反発について学びました。相異なる極は互いに引き寄せ、同じ種類の極は反発することをわれわれは学びました。プラスはマイナスを引き寄せます。二つの陽極は互いに反発し、二つの陰極も互いに反発します。自然界のいたる所にこの吸引と反発の法則が働いていることがわかります。

さてわれわれはこの法則について外見上の矛盾に出会います。外見上というわけは、ほんとうの矛盾は存在しないからです。しかしそれを理解するには、語の正しい意味及び一定の語が使用してある文の前後関係を注意深く観察することが必要です。このことは講座を注意深く読むことと、これまでの復習の必要性を説明するのに役立ちます。

前回の講座で想念波はその源泉次第で多くの異なる周波数を持つと述べました。高度に進歩した源泉からの想念は程度の低い源

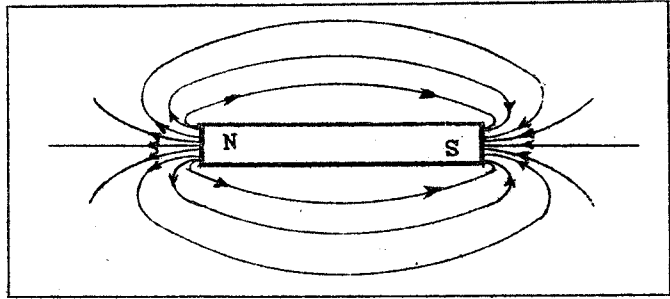
泉から来る想念波よりも高周波です。一個人の進歩の段階は、本人が感応する想念周波数の段階を決定します。

人間は自己の既成概念に合致する印象や考え方に急速に感応するというのはよく知られた事実です。これは結局、類は類を呼ぶ、という法則を意味するものです。想念波を意味する場合に類を類を呼ぶならば、これは矛盾でしょうか。矛盾ではありません。次にその理由を説明しましょう。

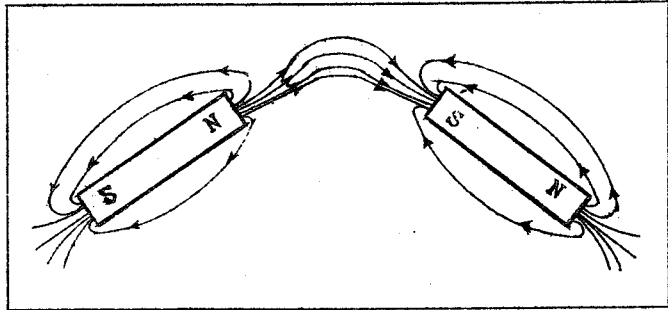
人間から放射される想念は、電波を作っている放射性フォースフィールドにきわめてよく似た一連のフォースフィールドといえます。そこでそれが類似の想念フォースフィールドに出会う場合どうなるでしょうか。両者は融合して大きさと強さの増した一大フォースフィールドになります。この場合、類は類を呼んだわけです。一つのフォースフィールドは別なフォースフィールドに引き寄せられて、二つは一体になったのです。

こうした想念を作り上げている各フォースフィールドが互いに類似しているにしても、そのおのおのは極を持っていると考えられます。プラス（陽極）とマイナス（陰極）です。それについて一つの考え方に、棒磁石が中心にあって磁力線の源泉をなしているときみなす方法があります。磁石の磁力線の出ている端は北極（マイナス）と呼ばれ、磁力線が入ってゆく方を南極（プラス）といいます。

これは次の第9図で説明されています。ここでは磁力線が北から出て南へ入ることを矢印が示しています。第10図で示されるように、二つの磁界が結合するとき互いに助け合います。もし同名の極が互いに近づくと結合しないで互いにしりぞけ合います。



第 9 図



第 10 図

かりにあなたがすべて全く同じ形である二百ないし三百個の小さな磁石を持っているとして、それを室内の中央へばらまいたとします。するとそれらはくっつき合って一つの巨大な磁石となり各個々の小磁石が持っていた磁界よりも数百倍も強力な一大磁界ができます。つまり一つの北と一つの南とを持った一個の磁石のような働きをするわけです。そして各小磁石の個性性は失われます。

この場合に類は類を呼ぶといえます。なぜなら、すべての小磁

石は全く同じ形のものであるからです。しかし各小磁石を調べてみますと、それぞれに二つの異なる磁極があり、隣接した磁石の反対の極がくっついていきます。したがってたとえ類は類を呼ぶとしても、反対の極同志が各磁石をつなぎ合わせているわけです。

さて想念は小磁石の周囲の磁力線に似たフォースフィールドであると考えてみて下さい。これが想念の場合に正しくあてはまらないにしても、私が了解させようとしている事柄を説明するのに役立ちます。人間の想念のいずれもが互いに全く同じ性質のものであるならば、それは近隣の想念を引き寄せ、両者は元の個々の想念よりも強力な一つの想念場というべきものを形成します。

前に私は、想念は送念者の進化の程度に応じてさまざまな周波数で存在すると述べました。いいかえれば、宇宙的な水準に肉迫する想念は地上的な水準の想念よりも周波数が高くなるに高いということとなります。こうした想念のパタン(型)を作り上げるフィールドは同じ水準にある想念場だけを引き寄せる傾向があるのです。低くても高くても想念群はそれ自体の独立したグループを形成します。

類は類を呼ぶとすれば、これはあなたに何を意味するか

何かの問題に関するあなたの考えなり知識なりの結果として、あなたは自分が習慣的に持っている想念に、類似した印象、だけを感じしがちです。たしかに低い、または高い性質の想念がときとして現われますが、通常は低級な想念が高級な想念よりもうんと容易に現われます。

このためあなたは自分の方へ来る思想や印象類を分析し、自分の求める目標に向かって進歩するのを助長しない印象類を捨てよう。心がける必要があります。ときとして感受する想念は宇宙的な性質のものであり、きわめて価値があるかもしれませぬ。その場合はそれを応用しなさい。しかしそれが「宇宙の主」または高度に進化した惑星に住む宇宙人から来たのだというような考えにだまされてはいけません。こうした考えは、この生涯でまだ用いられていなかったあなた自身の知識の貯蔵庫から来るのかもしれない。

霊界通信、霊界、霊人

類は類を呼びます。あなたが死者との通信を信ずるならば、死んだ人々から来る「メッセージ」をキャッチするようにする必要があります。しかし実際には死者との通信なるものは存在しません。とするとどうした「メッセージ」はどこから来るのでしょうか？

またあなたが地球の周囲にあると考えられている種々の霊界の存在を信じているならば、こうした世界から来る「通信」を感受することができるようになります。しかし霊界は存在しません。そうすると、こうした「通信」はどこから来るのでしょうか？

またあなたが高級な惑星の人々はテレビシイでメッセージを送っていると思ふならば、このようなメッセージを感受することができるようになります。しかし他の惑星の人々はこんな方法で地球人に連絡しません。とするとこのメッセージはどこから来るのでしょうか？

またあなたが、宇宙人とは四次元の生物で、意のままに物質化したり消滅したりするものだと思ふならば、あなたはこうした事件に出くわすかもしれません。しかし宇宙人はわれわれと同様に肉体を持っていて、このようなことをしません。とするとどうした体験はどこから起こるのでしょう？

各種のチャヌル（径路）を通じて来る印象（テレビシイ）の作用

この地球上の人間によってキャッチされる印象類を大別しますと、少なくとも六種類のグループすなわちチャヌルに分類できることがわかります。この内、三種類は望ましいと思はれるもので、あとの三種類は望ましくないものと考えられます。それらのおのおのは互いに他とは異なる周波数で作用すると考えられ、望ましくない目的を持った低い周波数から始まり、宇宙的な目的を持った最高の周波数にまで及んでいます。

右の望ましくないチャヌル三種類の内一つは現在地球上に住む三十億の人間の心から成っているといえ、あなたは驚くかもしれません。このチャヌルの中には憎悪、悪徳、不和、差別、ウソなどが満ちていることがわかります。このチャヌル中の考え方や印象はわれわれの進歩や発達にとって有害です。

次の望ましくないチャヌルは右のチャヌルとよく似ていますが、ただこの場合は地球ほどに発達していない惑星または太陽系の人類から発せられる想念や印象です。これらも最初のチャヌルと同じく誤ったものです。

望ましくない三番目のチャネルは、かつてこの地球上で生きて死に、あとへ記憶を残した人々が放った印象や想念から成っています。

ここであなたは、先に述べた霊界通信の眞の源泉がわかり始めるでしょう。それは死者または靈魂から来るメッセージなのでなく、地球の周囲を取り巻いている広大な幻想帯から引き出されているのです。この誤った知識の大貯蔵所は例の三つの望ましくないチャネルから成る想念でもってできています。類は類と呼ばれます。靈媒が感受能力を開発するとき、彼らは自分の信念や既成概念と合致する情報を受けます。彼らが靈魂を信するならば靈魂からメッセージを得ます。もし彼らが『火星第六セクター』と呼ばれる『高度な惑星の総師』の存在を信するならば、このような者から来るメッセージを受感するでしょう。

靈界は存在するか

現代の社会では靈界の存在を信する人が無数にいます。こうした人たちは靈界にたいする想念帯を絶えず作っていて、『靈人のマスター』から通信を得ようとしています。こうした想念が放たれることにそれは類似の想念に加わって強力な幻想帯を作り上げることになり、そのために靈媒はそれに同調するのがうんと容易になってきます。

多くの人は初めて心霊現象に出くわすと、こうした靈的なチャネルにたいして心を開くようにとすめられます。類は類を呼びますので、自分が正しいことをやっているという決定的な証拠と

なる確実な『通信』を得ようとしています。大抵の場合は体験をつんだ『先生』が「深入りをして実習を続けよ」とすめます。しかし通常その背後には金銭的動機がひそんでいます。(訳注。英米には民間の心霊指導者が多くいて、いかがわしいのも少なくない。また、この講座は本来英語を使用する国民のために書かれたものであることを銘記されたい)

或る意味では靈界は存在しますが、厳密に言えばそれは幻想的なものであって、自分が深入りしようとしている対象についてはほとんど何も知っていない人々の心によって作られているのです。

地球の全フォースフィールドは長年月のあいだ人間から放射された想念波の蓄積から成っていることを考えて下さい。これに含まれているのはすべて類似の想念によっていくどなく増強された誤った想念群です。この巨大なフィールド、すなわち先に述べた『広大な幻想帯』はいろいろの層から成っています。いわば周波数の異なることによって互いに分離した層です。たとえば或る層はアシユター(訳注。仮空の宇宙人名)とその数千の宇宙船団に関する想念帯であるかもしれません。アシユターその他の仮空の宇宙人について考えるように仕込まれた人は、この特殊な想念帯にきわめて容易に同調できるようになり、アシユターから来る多くのメッセージを受感するでしょう。

死者となった近親者との靈界通信を信する人は、故人の想念を帯びた想念帯に同調します。そして死後長く存在し続ける想念は死せる本人から来る『メッセージ』として出現するのです。いま私がいわんとしている要点はいろいろ表現を変えてくり返し説明されてきました。これは読者がこうした重要な事実を理解するの

に、反覆が必要だと考えられるからです。

かりにこの地上で生きて働いていた「大師」が死んだとします。すると彼の思想は想念帯として存在し続けます。充分に感受的な精神状態にある人はこうした想念を感受して、どこかの高次な世界から来た生きた人間と通信しているのだと思うでしょう。

霊媒

真の霊媒は存在するでしょうか、それとも霊媒とはみなイカサマ師なのでしょうか？ この問題を論じるにあたっては、使用する語の意味を定義し、同じ語にたいする他人の定義は一応無視することに、私の定義に従うほうがよいと思います。そうすれば私の説明は明確になり、混乱は少なくなるでしょう。

私は霊媒という語を好みません。それはしばしば誤用されてきたからです。むしろ私は「印象にたいして感受的な人」というほうを好みます。しかし多くの心靈研究者によって用いられている定義に従えば、霊媒とは「肉体を失った実体とまだ肉体を持っている人間とのあいだの通信のチャネルとして役立つ人」となっています。「肉体を失った」という表現は「肉体から去った」または「肉体から出た」とも定義されています。霊媒は実際には肉体を失った実体と通信をしていないということとこれ以上指摘することは不必要だと思えます。それは先に述べた幻想貯蔵所から来る印象類をキャッチしているにすぎません。それゆえ、真実の霊媒でさえも——これが実際に存在するとすれば——霊界または高度に発達した惑星の宇宙人と通信しているのではないことがわかりま

す。

「真に感受的な人」は多数存在します。それは大抵の霊媒とは異なります。その場合、トランス（恍惚状態）は全然関係ないからです。トランスを用いても用いなくても、印象は例の六種類のチャネル、すなわち望ましい三種類と望ましくない三種類から感受されます。靈魂から来るものではありません。

今日、広告を出している大抵の霊媒は、手品・魔術用品店で買える簡単な手品師用のトリックを用いて詐術をやっています。（訳注。これも米国での話）こうした連中のほとんどは真に感受的なものではありません。しかし前述の想念帯に実際に同調できる少数の人がいます。真に感受的な人はメガホン、エクトプラズム、ベルなどの小道具を使用しません。（訳注。これらは降霊実験で用いられるもの）小道具の一つとしてここでエクトプラズムをあげた理由をあなたは変に思うでしょう。その物は手品用品店で一揃いのセットとして説明書付きで売っているからです。（訳注。エクトプラズムとは降霊実験中に霊媒のからだから出る半物質状の神秘的なエネルギー源と考えられているもの）これについてはプロスコーア著「死者は語らず」を参照されるとよいでしょう。

私は数年前にあった一例を思い出します。世界で最も有名な霊媒の一人が、降霊実験会の物質化現象を赤外フィルムで撮影するために写真家たちを招待したのです。この結果は当時の或る心靈新聞で報導されました。

普通霊媒というものは暗黒中で本人を撮影させるといふことになる、本人はいかなる面白い仕草もしようとほしません。しかるにその記録映画フィルムを現像してみると、驚いたことに霊媒

媒が自分で靈魂の所作を演じることによって、靈魂の出現状態を作り出しているのです。これは靈魂自身にとっても大きなショックでした。なぜならその靈魂は（この場合は婦人）故意にイカサマを行なっていたのではなく、本人がトランスにあつたあいだ全く潜在意識的に行なわれたからです。本人ははじめに自分の行為の正しいことを信じていたのであつて、そのことは暗黒中で喜んで写真を撮らせたことからもわかります。もちろん本人はフィルムに何が写るかを全然考えてはいませんでした。

三種類の宇宙的な印象のチャヌル

先に三種類の望ましくないチャヌルについて簡単に触れておきましたが、この説明はいずれも適当な個所で何度も出てきます。

宇宙的な価値を持つ三種類のチャヌルも存在します。ここで、宇宙的価値、という場合それはわれわれ自身よりもはるかに高度に進化して、われわれの発達にとって有用である印象類を意味します。それはわれわれの進歩を助けます。実際にはテレビジョンの、望ましい、または望ましくないチャヌルの両方でそれぞれ三種類の区分をすることは、各種の印象やその源泉を分類するために人間によって用いられる便法にすぎません。もっとも細かい分類ができるのですが、いまは六大別して一時に種類ずつ説明するのがよいと思います。

宇宙的な価値を持つ一つのチャヌルは、地球人よりもはるかに高度に進化した惑星の人間から地球へやってくる想念類より成っています。これらはいろいろな方法で到着します。或る場合は惑

星間の空間を通過して直接に來ますし、或る場合は宇宙空間から地球へ降りそそぐ無数の微小な物質に印せられたまま來るものもあります。

宇宙のあらゆる天体間で絶えず物質の交換が行なわれていることはよく知られた事実です。高級な、低級なチャヌルの両方から來る想念はナリに刻み込まれ、ころした微小物質に乗って宇宙を旅し、ついに近隣の惑星に到着します。これらの想念印象と地球よりも程度の低い惑星群から來る想念印象とのあいだの唯一の相違は、その周波数です。

二番目の宇宙的なチャヌルは、「宇宙の因」から万人の内奥に存在する「英知」へやってくる印象類で成っています。この印象類は真に宇宙的な性質を持つもので、自然界の万物を貫いており、差別、非難、憎悪などを含んでいません。われわれがこの講座を研究する目的は、われわれが高度な宇宙的性質を持つこれらの想念に自動的に同調できるほどに自身の人格を形成することにあります。

宇宙的な性質を持つ三番目のチャヌルは、細胞から細胞へ伝わる通信です。実際には原子から原子へ伝わる通信というほうがよいでしょう。なぜなら自然のあらゆる原子は、原子自身が持つすべての体験の記録を自身のフォースフィールドの中に運ぶからです。各原子の魂の中にひそむこの「知識」は、実際には、宇宙の至上なる英知の微小な生氣の一部です。それは非難や差別を含まず、自然の法則の一部なのです。

人間は広大な混乱の海のさなかに生きている

この地球上に三十億の人間がいて、おのおの異なる想念を放っている有様を想像して下さい。加うるにこの地球よりも低級な、または高級な惑星群から無数の人間がこちらへ向けて想念を放っています。加うるに万物のあらゆる原子、あらゆる生物の細胞すべてから来る印象もあります。われわれ人間がこれらの印象類のほとんどに気づかないというのはきわめてさいわいなことです。なぜなら、もし気づけばそれこそ周囲は大混乱と喧燥の地獄図と化して生きてはいられなくなるからです。

もしあなたが憎悪、恐怖などの気持を持つ人か、またはいっ、と不安の感情を持つ人であるならば、あなたは周囲のあらゆる人々、場所、物品などから類似の印象を引き寄せます。自己催眠またはトランスを用いる人は、用いない人よりも外界の影響にたいして更に敏感になるでしょう。彼らはその場合特に強力な影響にたいして自分の心を開きますので、その結果こうした人々は一種の『緊迫感』で緊張しています。今日の教会では、こうした人は悪魔にとりつかれているのだと信じているのもあります。自分の心をこのような影響に支配させているために、多くの人々が習慣的に幻聴を起こします。彼らは声を聴き始めます。そして通常は自分が地上で特別な役割を果たすために神から選ばれているのだと感じます。しかし実際にはわけもわからずに深入りして、これまで何度も述べたように例の幻想の想念貯蔵所から影響を引き出してそれを感じているのです。

あなたのセンスマインドを正しい印象類に従わせる方法

多数の人は、あらゆる印象を感じてそれを応用しなければいけないという観念を持っているようです。これは、あらゆる印象を善なるものと考えているためです。先にも述べましたように、これは真実ではありません。大多数の印象類、想念、影響力などは（これらすべては各種のフォースフィールドの形をなしています）望ましくないタイプのものであり、避けねばなりません。精神修養の指導をすると呼する団体のほとんどすべては、会員にたいして精神統一力を発達させることが必要だと説きます。そしてこれを行なうための特別な練習法を教示します。たとえば精神科学なるものを教えると呼する或る団体は、さまざまのヨガの姿勢をとることと、精神統一中に想像力を働かすことをすすめてります。そこで実習者は自分の首筋を熱い油が流れ落ちると想像するように教えられます。この練習が定期的にくり返されますと、ついに実習者は実際に熱い油が首筋を流れ落ちるのが感じられるほどに、『進歩』します。

このような練習はきわめて好ましくないものであって、真の発達にとつて有害です。この場合に実習者が実際に達成するのはただ自己催眠術と、現実存在しない物にたいする幻想または幻覚を生み出す能力を開発しただけのことです。この心境に達すると、次には自分で実行してみたい他の物事にたいして自己幻覚を生み出すように指導されます。こうして実習者は自分の肉体から脱出してニセモノの靈魂遊離を行なう方法を教えられます。これはしかも自己催眠によるトランスによって行なう必要があります。ところが人間の『意識』による真実の自己遊離はトランスや自己催眠などを必要としません。

実際には何も流れていないのに、首筋に油が流れていると感じ得るほどの心境に到達するとすれば、実際には何も起こっていないのに靈魂遊離が起こっていると本人が思い込む事実を理解するのは容易です。かかる自己幻覚法を教える多数のいわゆる「先生」は大儲けをやっています。彼らは広大な殿堂を建てて、信者が経験したがっている物事にたいして信者の心を開く方法を教えています。想像や自己催眠のトランスは望ましい幻覚を生み出しますので、軽率な信者はこうした「先生」にころりと参り、自己の修養によって自分が偉大な「靈人」の足下において、地上へのメッセージを伝えるためのチャヌルになったのだと確信するようにになります。(訳注。以上も米国の話) そんな方法をこの講座で説いているのではないことはおわかりでしょう。

自己訓練の第一段階は簡単です。先ず自分の周囲のあらゆる物事や出来事について心配するのをやめなさい。世の中のあらゆる「悪」について憂慮するかわりに、世の中に「善」をもたらしよるな事をしなさい。いいかえれば、もしあなたが世の中の悪について書いたり語ったりする時間を、善を行ったり他人を助けたりにすることに費すならば、先ず最初にあなたにわかつてくるのは、悪のほとんどは消滅して、そのかわりに善が残るということです。自分が進歩してゆく速度について気を使うのはやめなさい。ゆったりとした気分を持つことです。自分の進歩は研究とともに自然に進むようにしなさい。自分のおかす過失を心配するのはやめなさい。過失なくしては学び取ることはできません。過失というものにはどれも一つの教訓を示してくれます。それから学び取ったならば同じ過失をくり返さないようにしなさい。

それでもなおかつあなたは、自分を支配しようとする無数の望ましくないフォースフィールドや影響力の砲撃を受けるかもしれません。しかしあなたが学習や能力を増進させるにつれて、望ましい印象とそうでない印象とを見分ける力が発達してくるでしょう。あなたの根本方針に反する印象なら投げ捨てなさい。あなたを助けることになり、自然の法則(宇宙の諸法則)に準ずる印象類なら受け入れるべきです。進歩するにつれてあなたの想念は高い段階に発達し、あなたは高級な源泉から来る想念を引き寄せることになります。類は類を呼ぶのですから、あなたは自分の根本方針や想念のパタンを高い水準に引き上げるようにしなさい。

あなたがいかなるタイプの想念に自分の心を寄せるかについて、その選択は自由です。怨恨の想念または他人に対抗するような誤った意志は捨てなさい。皮膚の色や信仰の異なる他人にたいして寛容の心を持つように自己訓練しなさい。他人からしてもらいたいと思うことを他人にするようにしなさい。これをあなたが意識的に練習すればするほど容易になり、ついには第二の天性となつて、自分で意識的な努力をしなくても自然の動作の一部となりま

す。他人があなたに食ってかかって怒りをあらわさないようにしなさい。おだやかな態度で物事を処理することです。これが重要な理由が少々あります。その最も重要なのは、激しい感情は肉体に大きな影響を与えるという事実です。もう一つの理由は次の第六課で説明します。そして怒りによって相手に与える有害な結果について述べるつもりです。あなたはそれを読んで驚くでしょう。

編集後記

◎多数の会員の方から暑中見舞状及び七月下旬の島根大水害にたいする見舞状をいただき、厚くお礼を申し上げます。有難いことに当地は水魔も訪れず、全然被害はありませんでした。今夏はカンカン照りの暑い日が続き、長く雨も降りませんが、当地は断水の心配もなく、日々が快適です。逆に都内の会員各位へ水キーンのお見舞を申し上げる次第です。

◎先号の編集後記で少々弱音を吐きましたところ、早速各方面から絶大なご援助を寄せられました心から感謝しております。おかげさまでどうか危機を突破できましたので、今後引き続いて本誌を刊行いたしますからご安心下さい。情報や資料類は豊富にありますし、タイプ打ちにもだいぶん馴れてきましたので、大いに活動するつもりです。ご期待下さい。なお今後の不測の事態に備えて、寄金はいつでも、いかほどの額でも歓迎いたします。

◎「生命の科学」は目下手元に第七課まで到着していますが、次第に重要な記述に進展しています。この講座の記事は少々くどいような書きぶりですが、これはア氏著「テレパシー」の簡略な内容を補うためです。なおハニー氏の「テレパシー講座」の試験は、受験希望者が少ないために先号の分から中止しています。ご了承下さい。

◎八月一日に都内在住の会員佐藤務氏が遠路をわざわざ編者宅へ来訪され、その熱意のほどに感動しましたが、多忙であったために充分なおもてなしのできなかったことを恐縮しています。そのとき「右にも左にも偏しないで、着実に、しかも高度な知識を得ながら円盤研究を行なうには、どのような文献を入手すればよいか」というご質問にたいして「それは何と云っても先ず英国の「フライイング・ソーサー・レビュー」誌を読むのがよいでしょう」

と答えた次第です。先号の本欄でも少し触れましたように、これは円盤研究誌として世界最高權威を誇るものです。英語の出来になる方はぜひ購読されるようおすすめします。語学の勉強にもなってよいでしょう。この注の仕方やその他の推せん図書については本誌十四ページをごらん下さい。

◎かつて天文学上、月の表面はしゅん険怪奇な固い岩だらけの土地だと考えられていましたが、これにたいして「アダムスキーは、空飛ぶ円盤同乗記」中で「或る地域は美しい砂粉状だが、一方、粗い砂利によく似た大粒の石を敷いたように見える部分もある」と述べて（同書百二十九ページ）、要するにソフトラなのだという事実をほめかしたのですが、これをレインジャー七号が見事に証明しました。これについて米国地質調査所のユージン・シュメイカー博士は「月面には約三十センチの厚さのホコリの層が表面にあって、その下の第一次層はおよそ固い岩石層のようだ。表面層のホコリの性質は多分ごく細かくくたかれた多孔質の物質だろう」といっています。面白くなりそうですね。

◎この「空飛ぶ円盤同乗記」が最近増刷されました。未入手の方は東京都文京区森川町七〇、高文社宛ご注文下さい。（三五〇円）（一九六四・八・七）久

日本GAP ニューズレター		1964	7月・8月
翻訳編集発行人	久保田八郎		
発行所	日本GAP		
	島根県益田市益田古川		
	振替 松江二六三〇		
	(久保田八郎個人名義)		
昭和三十九年	価額 一〇〇円・送料二〇円		
八月十日発行	一カ年分送料共七〇〇円		